お茶大子ども学
ブックレット

Vol.4

第6回
お茶大 *ECCELL* 子ども学シンポジウム
2012.10.13

これからを生きる子どもたちへ
～津守眞氏からのメッセージ～

話し手：
津守　　眞　氏
（お茶の水女子大学　名誉教授）
聴き手：
高橋　洋代　氏
（立教女学院短期大学　名誉教授）

「お茶大子ども学ブックレット」について

このブックレットは、お茶の水女子大学ECCELLプロジェクト（国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning）が発行するものです。本事業は、学生と社会人がともに子ども学すること、子ども学を生涯学び直すことをとおして、大人が成長していく場を創造することをめざしています。ECCELLで企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共有するために、ブックレットの形で発行し、学びの輪を広げたいと考えます。

※『お茶大子ども学ブックレット』は株式会社ベネッセコーポレーション寄附金により作成されました。

目次

開会挨拶および講演者紹介……5
1. はじめに……6
2. 津守先生の近況……8
3. 愛育養護学校の保育……10
4. 野口朗初代学長の思い出……14
5. 津守先生の青年時代……15
6. 保育学……19
7. OMEP 第21回世界大会……22
8. 皆さんに伝えたいこと……24
9. ECCELL の紹介……27
10. ペスタロッチー教育賞授賞式記念講演（巻末に全文転載）……29
11. 津守先生、房江先生の幼児期のエピソード……29
12. 日本の課題……33
13. 質疑応答……37
〈巻末資料〉……49
津守眞ペスタロッチー賞記念講演『幼児の教育』2007年4月号（第106巻第4号転載）
「若き日の志から五十年を経て」

第６回　お茶の水女子大学 ECCELL 子ども学シンポジウム

テーマ：「これからを生きる子どもたちへ～津守眞氏からのメッセージ～」

日　　時：２０１２年10月13日（土）13：30～16：00

会　　場：お茶の水女子大学　共通講義棟１号館３０４室

登壇者：

話し手：津守　眞　氏（お茶の水女子大学　名誉教授）

聴き手：高橋　洋代　氏（立教女学院短期大学　名誉教授）

総合司会：菊地　知子（お茶の水女子大学ＥＣＣＥＬＬ講師）

【開会挨拶　および　講演者紹介】

菊地　皆さん、こんにちは。今日のこの会を、本当に心待ちにしてくださった方が多いかと思います。私自身も心待ちにする気持ちに関しては、誰にも負けないくらいで今日を迎えました。そうしたら、朝、起きたら、空が同じくらい喜んでくれていて、とてもいい天気の中、こうして皆さんと集うことができ、津守眞先生と聴き手でいらっしゃる高橋洋代先生をお迎えすることができて、本当にそれだけでも喜びだな、感謝だなと感じております。

皆さんは一刻を争ってお話をお聞きになりたいだろうと思うので、余計なことはなるべく控えたいと思います。ただ、このＥＣＣＥＬＬの子ども学シンポジウムというのは、いつもみんなでこれからの子どもたちのことを、共に生きる者として一生懸命考えていく、そういう者たちの集まりの場にしたいという願いを持って、６回を重ねてまいりましたことだけ、申し添えたいと思います。

２０１１年3月の未曾有の大震災、それに引き続く原発事故の中で、私たちは大事な子どもたちに、「じゃあ、後はお願いするよ」などと軽々しく言ってはいけない事態の中に生きています。

私は、津守先生をはじめ大学や社会で学ばせていただいた中で、その時々自分がどのように人のために働くことができるのか、いつも自分で判断して、できることをしたいといつも願いながら、曲がりな

りにもやってきました。その真ん中に津守先生の姿から教えていただいたことがあったと思うのです。今のような時だからこそ自分で判断して、自分で何をしたらいいかを考えたいと願いながらも、それでもやはり不安があり、迷いがあり、悩みがあります。そのような中、ここで津守先生のお話を共に聞かせていただき、一緒に考える場にしていきたいと願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

津守眞先生は、皆さんご存知のように、お茶の水女子大学の名誉教授でいらっしゃいます。それから、現在は以前からずっとかかわっていらっしゃる、愛育養護学校の顧問でいらっしゃいます。

聴き手を務めていただく高橋洋代先生は、立教女学院短期大学の名誉教授でいらっしゃいまして、心細やかに動くたくさんの保育者の養成に、ずっとかかわっていらした先生です。

皆さんご存知かと思いますが、一番最近に出ました『私が保育学を志した頃』というご本を上梓されるに当たりまして、本当に何年もの長きにわたって、高橋洋代先生が当時の資料やお手紙など、すべて文字起こしをされたり、英文を訳されたりして、縁の下でたくさんのお力添えをなさってくださいました。

では、早速、今日、聴き手を引き受けてくださった高橋洋代先生から、自己紹介をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

1．はじめに

高橋　高橋洋代と申します。私は津守先生の教え子の一人です。ただ、非常に不肖の弟子で、お世話になるばかりで何の恩返しもしていなかったのを、ずっと心苦しく思っていたのです。そうしましたらと

言うと、ちょっと言い方がおかしいのですが、２００７年12月に先生が脳出血で倒れられて、本当にお好きな字を書くこと、文章を書くことがおできにならなくなったとお聞きしました。私は、ちょうどその前に定年退職して時間もあったものですから、先生の手になりたいとお電話を差し上げたのです。

そのようなことから、２０１０年から2年間、先生がアメリカにいらしたときに、婚約者の房江先生にあてて毎日毎日お書きになったお手紙の一部を、パソコンに入れさせていただきました。そういうお手伝いをしただけで、英語を訳したというのは間違いです（笑）。本当に英語ができないので、訳すことはできませんでしたが、そういうお手伝いをさせていただいたのです。

その2年間、大体一カ月か二カ月に1回ぐらい先生のお宅にお邪魔して、いろいろなお話を伺いました。それは本当に宝物のような時間で、私だけが独占するのは申し訳ないような気持ちでいました。今回、多分、聴き手としての役割を下さったのは、そのご縁ではなかったかと思うのです。

実は今日は、津守先生がお一人で自立なさった初めての講演会なのです（笑）。おうちからお一人でここまでいらっしゃいました。これまでは（お連れ合いの）房江先生とご一緒にお話しなさることが多かったので、先生はもしかしたら緊張なさっていらっしゃるかもしれません。でも、皆さんの明るい笑顔に、多分リラックスされたのではないかと思います。

では、こんなところから始めましょう。よろしくお願いいたします。

津守　どうもありがとう。もっとしょぼしょぼと数人で集まる会だと思っておりましたら、こんなに大勢お集まりとはね。この一般教育棟（現・共通講義棟）というのが、ずっと後で建ったものですけれど

も、とは言っても、ずっと前に建ったものです。そういうところで、こんなに大勢の方とお話しするなんてね、まだできるかしらんと思っている。今日は房江がなしで、高橋さんと菊地さんに助けられていたしますので、できない分はどうぞ想像で補ってやってください。

今日は高橋洋代さんが私の引き出し役になり、助け手になってくださいますので、どうぞよろしくお願いいたします。皆さんもその分を補いながら、どうぞ察してください（笑）。

2．津守先生の近況

高橋　先生がお話しになりたいことは、いろいろおありになると思うのですが、それが十分お話しできるように、楽しい会になるように私も努力したいと思います。先生は最近、おうちではどう過ごしていらっしゃるのですか。

津守　最近はね、寝ていることがたくさんあります。でも、今日は頑張って寝ないようにします（笑）。

高橋　時々、週に1回か2回、愛育の方にもお邪魔していらっしゃるのですね。

津守　そうです。私はお茶大を辞めてから後、辞める前からそうですけど、ずっと愛育養護学校で子どもたちと付き合うのが楽しみで、それはいまだに続けております。だけど、前のようにたくさんはできないので、大体、午前中に行けば午後はお休み、午後に行けば午前はお休み、そんな具合にして、大体、

毎週1度か2度は行くようにしております。それが私の心身の健康を保つ大事なことです。

そして子どもと出会い、それから職員と出会うと、何となしに元気が出てくるので、それを房江は焼きもちを焼きまして、「そんなに愛育に行くのが楽しみならば、何とかかんとか」と言うんですよね。でも、私はね、子どもと一緒に付き合い、職員と一緒におしゃべりをするのがね、それが本当に楽しみなんです。

高橋　最近、いろいろお付き合いしていらっしゃるお子さんや、印象に残っているお子さんはいらっしゃいますか。

津守　ええ。大体、いつも二十何人ぐらいの子どもたちが毎週来ますから、二十何人の子どもたちは、それぞれ名前も知っているし、性質も知っているし、こうすればああいうふうに反応するということも知っているし、そうやって子どもと付き合うのが楽しみです。それがなくなったら、もう自分でなくなってしまうような気もして、でも、こうなるのにはね、決して平坦ではなくって、僕がもともと根っから子ども好きかどうか分からないんです。子どもと付き合うのがとても大変なときがたくさんありましたし、現在は、むしろ子どもと付き合うのは楽しい方が多いです。

高橋　どんなときに大変だなとお思いになられましたか。

津守　眠いとき（笑）。もうそれを我慢してね、子どもと付き合うのはとても大変です。

高橋　愛育にいらっしゃる時は、朝、何時ぐらいから。

津守　大体ね、子どもが来る時間よりもちょっと遅くなるのですね。それで、朝、９時半か10時近くから、そして午後は、いる日は何とかかんとかし合いながらやりますが、職員と話をする時間がないのです。でも、職員と話すというのが、またね、普段のこの子の様子、あの子の様子を知るのに大事ですし、また、何かとても大事なように思いますので、職員と話す時間をできるだけたっぷり取りたいけれど、そんなにエネルギーを使わないでたっぷり取るというのは、なかなかこれはね、自分なりに工夫と力が要ることです。

３．愛育養護学校の保育

高橋　愛育研究所とのつながりから考えますと、先生は１９４８年から愛育養護学校にいらしているのですね。

津守　そうね。

高橋　『私が保育学を志した頃』を読んでいますと、こんなに早くから愛育研究所とのつながりがおあ

りになったのだなと。その中で、やはり障碍を持った子どもたちのお母さんにいろいろ頼まれて、なかなか入る幼稚園がないと泣き付かれて困っていらっしゃったとか。本当にお若いころからそのようなことを体験されていて。

津守　そのとおりです。

高橋　それで、１９８３年にお茶大をお辞めになってから、もう全面的に愛育養護学校に移られたわけですね。そのときに、もう本当に生き生きなさったとお聞きしました。

津守　そうです。そのとおり。

高橋　それはなぜですか。

津守　それはね、大学で一日いるなんていうのはね、あんまり面白いことじゃありません。むしろ、子どもと一緒にいる方が自分の本来を発揮できるし、子どもが私を元気づけてくれます。

高橋　もし、途中で何かご質問されたい方は、遠慮なく手を挙げてお聞きになってくださいね。

津守　本当ね、どうぞそうしてください。僕、ろくな話をしないから（笑）。

高橋　この前、このご本を読んだ感想を愛育養護学校で話し合う会がありました。そのときに、二人の目の悪いお子さんがいらして、一人はものすごく落ち着きなく動き回るお子さんで、もう一人静かなお子さんで。その後、そのお子さんとの関わりに何か変化がありましたか。

津守　その後、もうね、夏休みになってしまってね、そんなに付き合う時間がいまだにないのです。そんなね、マンマンデー（漫漫的）な付き合いしか今はできなくなってしまって、でも、これはね、皆さんも八十を過ぎた頃には、何だか訳が分からないくらい年を取ってきて、みんな同じことになりますから、どうぞご安心。

高橋　今まで付き合っていらしたお子さんの中で、とても印象に残っていらっしゃるお子さんや、かかわり方でとても困ったとか、そういうお子さんはいらっしゃいますか。

津守　そういう人はね、何人もいますね。本当に僕が大事にしている花瓶を、こう持ち上げてばんと置いたら、それで花瓶が割れてしまうとか、そういうたぐいの話は切りがないし、それは皆さんのところだって、似たようなものだと思います。子どもと一緒にいれば、そういうトラブルは幾らもある。それをどれだけ慌てず、動ぜず、落ち着いてその子のやることをしっかりと見ながら、そしてその子と応答

を続けていくかという、それが私はプロだと思うのです。私もね、こうやってやっている間に、もう何年たったのか分からないくらいの時間がたってみて、初めて自分がこのごろはプロになれてきたかなというような気がしています。

高橋　愛育養護学校は、校長室でもどこでも、子どもが入ってはいけないお部屋がないのですね。

津守　はい、そうです。だって、学校というのは子どものためにあるのだから、当たり前の話でしょう。職員室や校長室がきれいになって、何も散らかっていないなんていうのは、それは学校とはいえない、園とはいえない。私はそんなふうに思って、ほとんど一生涯を過ごしてきました。

高橋　愛育でのこの前の話し合いのときに、静かであまり動かない、近寄ろうとすると、すっと行ってしまうお子さんと、なかなかかかわるきっかけがつかめないとおっしゃっていましたね。そのときに愛育の先生方から質問されて、「それは全部僕の責任です」とおっしゃったのがとても印象に残っているのですが、それはどういうことですか。

津守　それはね、もう僕の方にね、子どもに応えるだけのエネルギーが残らなくなってしまって、エネルギーが足りないのです。子どもとの付き合いというのは、ともかくもエネルギーを必要とするからね。その力をどうやって自分が発揮するかということが、子どもと付き合うときに、どうしても必要なこと

じゃないかと僕は思っています。

高橋　では、もし先生がお若かったら、もうちょっと付き合えたという思いがおありですか。

津守　ありますね。うん。本当に申し訳ないです。今、こんなに年を取ってしまって、子どもと十分にエネルギーを出して付き合えない、それは年を取った者の残念さです。でも、これは、まあ、しょうがないですよね。残念だけれども、それなりにいいこともあるんじゃないかと考えて付き合い続けます。これからどこまで付き合い続けられるのか、それはまだ分かりませんけれども、付き合い続けたいと思っております。

4．野口朗初代学長の思い出

津守　ここに来るとき思っていたのですが、お茶大が新生大学になってからの、初代の学長さんが野口朗先生といって、絵を描く方で、今、皆さんが入って来られた、この一般教育棟のすぐ裏側に学長の官舎があり、そこに住んでおられました。その後学長さんが替わったときに、学生寮になったのです。その先生から、僕は非常に懇切にいろいろなことを教えていただきました。そのころのお茶大というのは、学長室というのが全然別の所にあって、今とは違った趣でした。だけど、またね、今と同じこともいっぱいあります。それが野口朗先生との、初代学長との初めてのお付き合いであります。それから何代も何代も学長も替わり、学生も替わりました。

野口朗先生は、お茶大の建物の正面の所に、しょっちゅうキャンバスを持ち出して、まだ学生も来ない静かなときに、そこで絵を描いておられました。そのときの絵は、まだ大学にあるはずなのですが、それがどこにあるかということは私はよく分かりません。中庭にとてもきれいな八重桜があって、その八重桜が2本ありまして、その学長さんが大変好んで、また持ち出して絵を描いておられて、そういう学長さんの落ち着いた佇まいというのが、大学全体を何か穏やかに、また活気づけたのだと思っています。そういうことが何か世の中からだんだん減ってきたみたいな気がして、落ち着いた学長のそういう佇まいというのが、本当に大事なものだなと、何か言葉にならないけれども、私は思っております。

5．津守先生の青年時代

高橋　先生がお茶大にいらしたのは、１９５１年ぐらいからですが、初めは非常勤でいらしたのですか。

津守　うんと若いときね。まだアメリカに行く前で、もちろん結婚もする前、そういう若いときから、附属幼稚園にはしょっちゅう行っていました。附属幼稚園にそのころいた先生たち、もう死んでしまった堀合さんとか、村田さんとか守永さんとか、そういう方々が本当に私を育ててくださった。私は、そういう方々のおかげで、保

育とはどういうことかということが、おぼろげながら分かるようになり、大変楽しい時期がありました。

高橋　お茶大にいらっしゃる前に、ちょうど先生は留学をなさいましたね。そのまた前をたどっていきますと、先生のお生まれになった１９２６年から、１９３６年の二・二六事件を経て日本は戦争に入り、先生は学徒出陣で。

津守　正確に言うと、学徒出陣とは違うのです。僕は、ただ召集されて入営です。学校が短縮になって、私は浦和の高等学校で、浦高というのですが、そこで本来3年のところを2年で卒業になって、そして大学に入ったのです。大学に入って間もなく、マッカーサーが来たのです。

高橋　大学に入られてから、何カ月か兵隊になられたのですよね。

津守　ああ、そうです。

高橋　それで、軍国主義がどんどん強くなってきて軍隊に入られて、そこでとても理不尽な体験もされて、それで戦後になる。

津守　そう。もう戦後、直後に帰れて、それは本当に幸せで、兵隊から帰ってきたときには、もうこれ

で二度と再び兵隊に取られることはないということを実感したとき、そのときは本当にうれしかった。私は、そういう体験をずっと続けてきました。

高橋　それでアメリカにいらして、それまでは敵国だったわけですよね。十三ものいろいろなご家庭に一月ずつホームスティをされて、翌月にどこに行くか分からないような状態で留学生活を送られたわけですよね。その経緯などをご本にお書きになっていらっしゃるのですが、戦前の日本、戦時中の日本、それから、その時代のアメリカ、そういうものを振り返られて、今に続いてお考えになっていらっしゃることは何かおありですか。

津守　それはたくさんあって、ありすぎて、お話しするのには長くお話ししないと。でも、それは省きます、今日はね（笑）。本当にそうです。私が大学に入った年には、皆さんも知っている名前もあるだろう、和辻哲郎とか、出隆とか、そういう名物教授がおられました。

大学に入ったときにはそうだったのですが、戦争で日本が敗れて、この前、テレビでもやっていましたが、近衛文麿はピストル自殺しますよね。それから、私の軍隊の直属上官である杉山元帥は、奥さんと一緒に割腹自殺をする。そして、二重橋の前では、毎日のように誰かがそうやって割腹自殺したりして、そういうときがある時期続いて、そのときのことをもう今は忘れてしまっているから。でも、これはね、忘れてはならない日本の歴史だと思うのです。その歴史を今はないことにしてしまって、そして、大事な教育基本法をなくしてしまったでしょう。僕は、あれはね、教育の一番の基本の法なのに、それ

をなくしてしまったことはね、もう何年かたつのだけれども、私には許せない感じがあります。

高橋　アメリカからお帰りになったときに、保育要領が幼稚園教育要領に変わっていたということも、非常に残念がっておられましたね。

津守　そうですね。あの前は保育要領といって、それはアメリカがお仕着せしたガイドブックだといわれて、だけど、それは非常に親切にできていたのです。多分、図書館に行けばね、保育要領やその時代の資料がいろいろ残っているはずです。もう図書館でしか見られないというのが何とも残念ですけれども、何といいましょうかね。これは戦後日本の犯した罪悪だと僕は思う。

高橋　先生がお手元にお話しになりたいことのメモを用意してくださっているので、自由にお話しいただきたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

津守　僕も今日はね、こういう大きな会で話をするというのでね、大変緊張しまして、最初は全部、一字一句原稿にしないといけないかと思ったのです。だけど、一字一句話をしようと思うことを原稿にするとね、こういうお話にならないのです。アメリカの学会などではね、もうちゃんと、きちんと全部用意された原稿を読むような学会がたくさんあるのですけど、私はね、どうもそういうことは、やっていても自分の言葉でしゃべれないような気がしました。でも、今日は高橋さんのおかげで、緊張はしてい

ても、何とかかんとかこうやっておしゃべりしています。

高橋　お続けください。

津守　その続けてというのがね、私が3～4年前に脳出血をしたものだからね、それ以来、字は書けなくなる、それから話もできなくなる、そんなことがありました。2～3年前かな、初めてしゃべったときには、もう本当に私は困ってしまったのです。途中で話をちょん切る形になってしまって、もう房江にも非常に迷惑を掛けて、それから参会者の方にもいろいろと迷惑を掛けてしまって、ああいう思いをしたくないなと思ったものだから、少しはましなようにと思って、こんなにメモはしてきたのですけれども、十分じゃありません。どうぞ続けて聞いてください。こうやっておしゃべりするのは割かしできるのです。

6．保育学

高橋　私が大学生のころは、先生がアメリカから帰られて、本当に発達心理学の最新の情報を講じてくださったのですが、黒板は全部英語だし、ちっとも面白くなかったのです（笑）。

それで、この先生は留学帰りの先生なんだということと、ちょうどそのころお子さんたちが次々にお生まれになって、私たちはもう本当に生意気な学生でしたから、黒板に「今日は津守先生、ご出産のため休講」と書いたりして、本当に尊敬もしないで。その頃は、先生の偉さが分からなかったのです。こ

の本を読ませていただいて、先生はお若いころから現在まで一貫していらしたのだということが本当によく分かりました。

先生はお茶大の中でいろいろつらい思いもなさったと思うのですが、私が印象的に覚えているのは、もう卒業してだいぶたってからなのですが、幼稚園の庭のイチョウの木が、職員宿舎ができるので切られるというときに、先生はご自分の首を懸けてイチョウの木を守られたのです。そういうことや、お茶大をお辞めになって愛育に移られるときなど、本当に潔くすぱっと、人生をとらえ直すように進路を決められる。

講義も、ある時期にアメリカ心理学を全部お捨てになって、「何にもしゃべることがなくなったけども、全部捨てました」とおっしゃって、それから後、保育に転換されるわけです。そういうあるきっかけがあったときに、180度違う道を選び取られる勇気みたいなものは、どこから来るのですか。これは私がとても聞きたいことなのです。

津守　そこの前に、それに当たってはね、幼稚園の保護者に江戸英雄さんという方がおられて、その方と森田宗一さん、そのお二人の方に何か非常に励まされ、また力を与えられて、大きなイチョウの木が切られるというときに、そういう力が出てきたんじゃないかと思っているのです。

それから、そのころはね、何だか忘れちゃった。また後でお話しします。

高橋　はい。あとは保育の転換ですね。アメリカの発達心理学から、ご自分が本当に探りたいという保

育学の方に転換なさったきっかけは。

津守　そうですね。僕は今、「保育学の学徒」だと自分を言っております。幼児教育の最初のうちはね、幼児教育の専門家だと言っていた時期もあります。だけど、こうやって年を重ねてくると、幼児教育ではなくて保育学だと、私は自分自身を言いたい。そして、また実際、自分がやっていることは、幼児だけではなくて、保育全般にかかわることです。

保育学というのは非常に広いですよね。ほとんど、もう学問全体に及ぶような広さを持っているのが保育学。だけれども、その保育学という言葉は、世の中ではまだ認知されていませんね。その一番最初は、保育学会という学会ができたということ。保育学以前に保育学会という学会ができた。それによって、保育学という一つの結び付きの糸口がそこにできたのではないかと思います。

高橋　先生は、保育学とは何かと問われたら、どのようにお答えになりますか。

津守　それは答えられないですね。非常に幅が広く、これから先、どういう学問があちこちに生まれるかも分からない。これから先に生まれてくる、そういう新しい学問も含めて、われわれにとって、人間にとって大事な学問。人間にとって大事な学問。

7．ＯＭＥＰ第21回世界大会

高橋　１９９５年にＯＭＥＰ（世界幼児教育・保育機構）の第二十一回世界大会が横浜であって、先生が会長をなさいましたね。そのときのテーマが「いま、人間を育てる―子ども時代の充実に向けて―」ということでした。人間を育てるときに、これは欠けてはならないと思う中心の概念はありますか。

津守　そうですね。あのときは本当に、アジアで初めての世界大会をやるというので、これは大戸さんや何かに本当に力を付けていただいて、そしてようやくできた大会だったと思いますが、その題を決めるのは本当に大仕事でしたね。そのうちにそれは、大戸さんもここにおられるし、あれは大変だったですね。

高橋　大戸先生、いらっしゃいますか。何か一言お願いします。

大戸　決めるのは本当に大変でした。でも、いかにも先生が会長になって、世界大会にふさわしい題でした。ところが、世界的な水準で見ると、結構、直されるのです。英語でどう表現するか。例えば、日本語で「いま、人間を育てる」というのは何となく分かるのですが、では、英語でどう言うか。

津守　分からないんだね、本当に。

大戸　ええ。それで勝手に直されたような感じもしましたが、私たちは大変いい題だと思いましたし、特に「子ども時代の充実」というのは、それ以後もずっと合言葉で言ってきたように思います。

津守　本当ね。「いま、人間を育てる」というその一行を、英語にするというのができないのですよね。どうやったら英語になるか。英語だけではない、ほかの言語でもです。そして、後で知ったところによると、どこそこの言語だと、それにぴったりの言葉があるということを後で教えてもらいました。でも、大勢の方のおかげで、そんな世界大会に僕も一翼を担わしていただいたことは、本当にありがたいことでした。私の人生の歴史の中で大書すべき、大きな字で書くべき出来事です。

高橋　その世界大会の時に、「子どもは未来である」「子どもに未来を」という言葉を津守先生は好まなかったと、房江先生から伺いました。子どもは未来ではない、子どもに未来を背負わせることはできないと、そのとき先生はお考えになって、子どもと一緒に今を生きている私たちは、その「いま」を変えなければ歴史に学んだことにはならないと言われて、それで「いま、人間を育てる」という言葉にこだわられたのだと、房江先生からお聞きしています。その「いま」ということを強調されるのは、愛育の保育などからですか。

津守　そう。それが保育者ですよね。やっぱり保育者を大事にしなかったらね、日本は良くならない。保育者をこそ、保育する人間をこそ育て、大事にしなくてはいけないと思います。

8．皆さんに伝えたいこと

高橋　ここにはたくさん保育者の方がおいでになっているのですが、今日のテーマである「これからを生きる子どもたちへ」というのは、子どもたちがここで聞いているわけではないので、子どもを育てる方々へ先生がお伝えになりたいメッセージをお話しになるということだと思うのです。先生が愛育で、障碍を持った子どもたちとかかわって知ったことはとても大事なことだと、そのことをお話になりたい、とお聞きしました。何か具体的に挙げてお話しいただけますか。

津守　そもそも障碍を持つとか、障碍を持たないとか、それは一体どういうことか。私は今、子どもの後にくっついて歩きながら、自分自身が障碍を持つようになったということを身をもって感じています。また、僕は銀行にも郵便局にも行かれません。そんな難しいことは僕にはできないから、とてもいろいろなことについて、妻の房江にはとても負担をかけています。

銀行にも郵便局にも行かれない人間が、どうやって社会生活をするか。ちょっと立ち止まってその身になってみれば、たちまち分かってくるでしょう。今は不便な時代ですよね。証明書やら何やらがいろいろなければ社会生活ができない時代。そういうところで字が書けないだけじゃない、話ができない、おしゃべりができない、それから計算ができない、そういう人がどうやって生きていかれるか。しかも、それはほそぼそと生きるのではなくて、何か堂々と生きていくことができるやり方がね、あるんだと思うのです。それを見つけるということが、これからのいわば障碍児教育の大きな課題だと思います。

養護学校の先生、あるいは障碍を持つ子どもの学校の先生は、そんなことぐらい誰でも分かっている

だろう、自明のことだと言われるかもしれないけど、それは自明でも何でもない。普通に字を書いたり何かしている間は見逃している、そして偉そうなことを自分は分かっているような気がしている。実は子どもほどに分かってやしないのです。

障碍児なんて言うけれども、これは田口先生がね、時々それに触れることを言っていました。田口先生というのはね、私の同僚でしたけれど、もう何年か前に亡くなりました。ちょうど、今、ここを歩いてくる途中の、大学院棟という、比較的、新しい棟があるのですけど、そこの主のようにしておられた。もともとは整形外科のお医者さんで、そして児童学科の先生をしていて、ここにフルブライトの教授で来られたデール・B・ハリスという先生が、田口先生のことを非常に高く評価して、いつもその先生と一緒に、ちょうどそこで、出入りするそのすぐ裏の建物の中で、一緒に歩いたり、話をしたりと、そんなことがこの現場そのもので起こっていた。

高橋　先生は脳出血で倒れられてから、本当によく回復なさったと思うのですが、伺うたびに言葉が少しずつはっきりされて、表情も、それから顔色も良くなられました。初めはパソコンもおできにならなかったのが、最近はパソコンでお打ちになりますよね。

津守　こういう文明の利器というのはね、すごいものだと思います。これは大事にしなくてはいけないし、これからどんどんそういう新しい最新の器具でも何でも、それを使って使いこなす人がいないといけませんね。

高橋　先生のご本と同じころに出された、『輝（ひかる）―いのちの言葉―』というご本がありますね。私もあれを読んで、とてもびっくりしたのですが、いわゆる重症心身障害児といわれる、寝たきりで何も言葉を発せられない子どもさんが、本当に深い言葉の世界を持っていたということが分かったのも、一つの文明のというか、パソコンの力ですね。

津守　本当にそうです。あれは國學院大學の柴田保之先生、という先生が、本当にもう特別な力を持っていて、パソコンの力を借りて子どもが言葉にできない言葉を探し出す、そういう技術、そういう力を発揮された。あの本は、そうしてできた、とても特別なものなのです。それには、本当に國學院大學のその先生の力は大きいですね。

こういう話をね、私はこうやってあなたに導かれて、こうやっておしゃべりすれば、ぺらぺらおしゃべりが出てくるのですけど、途中でそれが止まるとね、もうどこからどういうふうにつなげていったらいいか分からない。分からなくなる。それが、いわば障碍ということの一つのポイントじゃないかと思うのですね。

世の中には障碍を持つ人はとてもたくさんいるわけで、その人たちも優れた力をいっぱい持っているのです。持っているのに、それは人からは認められず、人にも分からず、過ごしてしまう。もっと気楽にみんながおしゃべりや表現ができるような雰囲気も必要なのですよね。

障碍を持った人が気楽に、自由におしゃべりできるような、そういう世の中をどうやってつくっていくか。世の中というと、ちょっと大げさすぎるのですけど、そういう環境をどうやってつくっていくか

というのはね、実は障碍児教育だけではなくて、むしろ一般教育の中で非常にこれから大事にしていかなければならないことではないかと、私はこのごろつくづく思っています。多分、僕の生きている間には、それはほんのちょっとしか進まないでしょうけど、それから後の時代、次の時代に向かってね、これはきっと思いもよらない具合に展開していくに違いないと僕は思います。

菊地　いったん、休憩を入れますね。

その前に、「そもそもＥＣＣＥＬＬとは何？」という方もいらっしゃると思いますので、私たちの「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業全体のリーダーであります浜口から、この会の趣旨を紹介させていただきます。そして、その後に休憩を取って、また会を再開したいと思います。

９．ＥＣＣＥＬＬの紹介

浜口　ちょっとコマーシャルに入らせていただきます。ＥＣＣＥＬＬという幕にも書いてありますが、これは今、私たち大学と附属幼稚園、いずみナーサリー、それから社会人プログラムが一緒になってやっているプロジェクトの名前です。

ＥＣＣＥというのは、今、英語に訳すのは難しいというお話もあったのですが、私が学生のときに、日本保育学会を英語で何というかを津守先生が考えていらしたときに、「Early Childhood Care and Education」ということになったよという話を聞いたことを覚えています。「Early Childhood Care and Education」でＥＣＣＥです。保育、幼児教育の意味です。それにＬＬは、「Lifelong Learning」という

ことです。生涯をかけて学び続けるということで、「Lifelong Learning」。幼児教育、保育について学ぶことを生涯続ける、この大学をこういうことを続ける場にしていきたいという思いで作っているプロジェクトが、このＥＣＣＥＬＬというものです。

ウェブで「お茶大、ＥＣＣＥＬＬ」と検索してくだされば、今回のようなシンポジウムや、大学内でやっていることなど、いろいろなご案内をホームページで更新しながらお出ししておりますので、時々ちょっと思い出して見てくださるとうれしいと思います。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

菊地　浜口先生、ありがとうございます。では、15分ほど休憩を取らせていただきたいと思います。

＊＊＊休憩＊＊＊

菊地　後半を始めさせていただきたいと思います。休憩ですとお伝えしたら、たくさんの方が、ご自分がこうしてここにいらしていることを津守先生に伝えに来られて、本当にそういう会だと思ったのです。たまたま本当にたくさんの人たちがここに会することになりましたが、多分、津守先生の思いも皆さん方の思いも、それぞれが小さなテーブルを囲んで保育の話、子どもの話、これからをどうしていこうかという話を、決して声高にではなく、けれども力強く語り合うようなイメージで、近しい者たちの小さな交わりがここにもあり、ここにもありという会になったらいいと願っています。

10．ペスタロッチー教育賞授賞式記念講演（巻末に全文を転載）

菊地　後半を始めるに当たって、先ほどの話を聞いていて、そういえば先生が全体を見通した保育学というものを志されて、保育学徒として今も学んでいるという姿のことを、比較的まとめてお話をされたことがあるということに思い至りました。２００６年に先生はペスタロッチー賞を受賞されました。ペスタロッチー賞は毎年、広島大学で授賞式があります。津守先生は、２００６年の受賞者に選ばれて、そのときに受賞のメッセージをされたのです。浜口順子先生が編集主幹である、１９０１年創刊の「幼児の教育」という雑誌の２００７年４月号に、ペスタロッチー賞の授賞式のときの記念講演の全文が載っているので、紹介させていただきます。今、お茶大のＨＰで「TeaPot」というところから「幼児の教育」がアーカイブスとして検索できますので、どうぞ読んでいただけたらと思います。

高橋　先生、いかがでいらっしゃいますか。

津守　いや、別にそのとおりです（笑）。

11．津守先生、房江先生の幼児期のエピソード

高橋　今、お聞きした中に、やはり幼児期は人間の根っこを育てる時期だとありましたが、先生は幼児期のことは、何かご記憶に残っていらっしゃることはありますか。

津守　自分の幼児期のことというのは、それはまた今度あらためてね、もし余力があれば、自分の幼児期のことをたどって考え直すのは課題の一つです。

高橋　一つだけ、何かエピソードは。

津守　私には祖父がいましてね、私の祖父ですから、もう本当に昔々ですが、その祖父と一緒に、井戸の脇にナメクジがはっているのを、随分時間をかけてじっと見ていたというね、それが私の一番古い記憶の一つです。

高橋　そうですか。何かやはり津守先生らしいですね（笑）。房江先生からお聞きしたことですが、行列する、並ぶ、みんな一緒に歩く、円になって並ぶなど、そういうのがお嫌いだったそうですね。

津守　そういうのは、もう根っから自分が受け付けないの。3歳のとき。僕、3年保育なのですよ。そんな昔にね、3年保育の子どもなんて珍しかったのです。でも、その3年保育の中でね、僕がそうやってみんなで輪になって歩くというのはね、もうどっちがどっちだか分からなくなってしまってね、いつも迷子になって。

高橋　それもすごく先生らしい。小さいときのご記憶の底にぼーっと浮かんでくるイメージというのは、

結構、その人の大人になっての世界の原型のようなものとしてあるような気がするのですが、ほかにはありますか。

津守　それは掘り起こしていけばね、いろいろあると思うのだけど、すぐには思い付かないですね。

高橋　この間、房江先生が藤沢の幼稚園で講演なさったときに、「生涯の中の子ども時代」という題だったのです。それで、生涯というスパンの中で子ども時代を考えるということかと、私も思って聞きに行ったのです。そうしたら、それは房江先生の子ども時代の記憶の話だったのです。それが房江先生の人格をとても象徴するようなイメージだったので、一つ紹介させていただいていいですか。

房江先生は小さいときからとても小柄で、ぼーっとした女の子だったのだそうです。それで、手のしもやけのひどい子が、先生の前に順番に並んで、お湯の中で手をもんでもらいお薬をつけてもらうというときに、並んでいたらどんどん自分の前に男の子たちが入ってきてしまって、お漏らしをしちゃったのだそうです。そうしたら先生が、小使いさんのお部屋に連れていってくれました。土間にいろりが切ってあって、とても温かい感じがして、そこにお湯が沸いていた。その小使いさんと奥さんが自分をきれいにしてくれて、またお教室まで送ってくれた。

それで、ちょうど帰りのときに、校門のところで小使いさんの奥さんが、ひもで縛ったものをこうやって持って、「はい、房江ちゃん、お土産よ」とくれたのだそうです。それで、「お土産、お土産」と帰っていったら、友達が「それ何？」と言うから、「お土産よ」と言って、２人一緒に「お土産、お土産」

と言っておうちに帰ったのだそうです。そして、「はい、お土産よ」とお母さんに渡したら、お母様は「ああ、そう、お土産なの」と言って受け取られたと。

その一連の記憶は、先生の中ですごく温かい記憶として残っていらっしゃるようなのです。そういう子どものころの記憶の中から、自分がどうやって生きていけばいいのかという、人間としての指針のようなものを、自分の体の中に積み上げてきたような気がするとおっしゃいました。

津守先生の今のエピソードをお聞きしていると、やはりじっと観察するとか、ナメクジが子どもに変わっても（笑）。それから、みんなと一緒に同じ行動をすることがお嫌いだというのは、本当に一生の先生の生き方を、ある意味では象徴していると思いました。

先生はある時に、これが正しいと選択される場合に、多分、少しは迷われるのでしょうが、１８０度ぱっと転換されるというのは、このご本の中にあったのですが、お父さまの影響をお受けになっていらっしゃいますか。

お父さまが戦争中に通信機の仕事をしていらして、それが軍にも使われていたということで責任を感じられて、すべてのお仕事を50代のときにお辞めになって、聖書を読む毎日をお過ごしになったということで、そういうお父さまの決断は、先生に影響をお与えになりましたか。

津守　そうですね。それはありますね。非常にあります。そういう私の父の決めるときの早さと確かさというのは、私は実にありがたかったと思っています。私がこういう子どもの仕事、しかも障碍を持つ子どもの仕事に就くというときに、私の父はね、それをとても励ましてくれました。そして、心の中で

はね、何かがあれば自分はすべてをなげうって助けたいと、そう思っていたらしい。そういうことが後になって分かりましてね、親というのは本当にありがたいということをつくづくと考えました。

高橋　やはりご両親の影響や育ちというのは、お若いころから今までずっと変わらない、先生の一つの柱になって。

津守　それは私だけではない、ここにいる皆さんがそうだと思うのですよね。父親、母親から受けたそういう貴重な財産を、みんなそれぞれがしっかりと持っているに違いない。その財産を確かにしながら、これから、今この時代というのは、本当に何だかわれわれの若い時代にはなかったほどの大変な時代ですね。こういう時代に、そういう幼いころから積み重ねてきたわれわれ日本人の思いをね、どうやって健やかに育てていくかというのは、今の日本の当面している大きな課題でしょう。

12. 日本の課題

高橋　今、日本が当面している課題で、先生が一番案じていらっしゃることは、どういうことでしょうか。

津守　それはもう、今、当面している日本の課題。大きな大きなことで、人の顔色を見ないで、自分でしっかりと考えて判断し、決めていく、そういう力を養っていかなければならない。しかし一体、今の

幼児や児童、子どもたちは、どうやってそれを身に付けていくことができるでしょうか。本当に毎日新聞を見て、テレビを見るたびに、何だか恐ろしくなるようなことがいっぱいであることは、ここの皆さん、感じておられるのではないでしょうか。それをどうやって引き留めて、引き留めて、そして、今の時代をまともにつくっていけるのかということ。その課題に向かってね、今日、こんなに大勢おられるから、本当にそれが積み重なって、今はよく分からないけれども、日本の、また世界の力になっていくのだろうと思います。

高橋　本当に課題が多い現代だと思います。

津守　本当に現代はね。

高橋　このたびＥＵがノーベル平和賞を授与されました。戦争が頻繁に起こっていたヨーロッパで、互いの国々のたいへんな努力の末に、国境を越えた集団ができた。ドイツが犯した罪は、今でもいろいろな映画で繰り返し繰り返し訴えられていますね。そのたびに、多分、ドイツの人たちは黙ってそれに耐えるというか、そうだ、そうだと言い聞かせていらっしゃるのか分かりませんが、繰り返し繰り返し、忘れないで起こっています。そういうお互いの努力の末にできたＥＵに対してノーベル平和賞が贈られたのは、私は非常にすごいことだと思うのです。

日本は今、中国や韓国との間に島の問題を抱えていますが、日本が東南アジアや中国、韓国の人たち

に対して行った理不尽な行為に対して、どのくらい誠実に謝ってきたかということを考えると、本当にこれから日本が払わなければいけない努力が無限にあるように思います。

津守　そうですね。本当にそうです。そのことを考えると、「現代」の責任というのは大きいですね。今、少年であり、少女であり、そして小さい子どもであり、また、成長しつつある、やや大きくなった子どもたち、この子どもたちに対して、何か私どもは大変申し訳ない思いであると同時に、何か今からでも改めることは改めて、そして、思い切って何かをやるときなのではないでしょうか。

すぐに言葉が出てこないのだけれども、僕は政治のことなんかは分からない。分からないというよりも、あまり口は差し挟まないことにしているけれど、しかし、何か恐ろしい、少しでも恐ろしさを減らしていくために、私どもが引き留めていくことがあるのではないか。それをこれからもやっていきたいと、こんな年寄りですけれども、年寄りなりに、年寄りだなんて言っていないで、その上にあぐらをかいていないで、むしろ若々しく、そこをこれから挑戦してやっていきたい。それは私自身の、現在、毎日思っている課題です。

高橋　本当に重い課題ですが、保育をする者として避けて通れないというか、先生のこのご本を拝見させていただいて、先生が一貫してお変わりにならない、縦軸が全くぶれない。でも、横軸というか、子どもを前にしたときに、非常に柔軟にというか、子どもを前にしたときだけではなくて、留学生活の中でこうやってみた、ちょっと反省して、また困って、また気を取り直してという、この横のぶれがたく

さんあるのです。それでも、やはり縦の線を一貫して持っていらっしゃる。その中心には、津守先生の場合はキリスト教の信仰がおありになると思うのです。そういう人間として持っているものが、やはり保育者の子どもの見方や子どもへのかかわり方などとつながっているのでしょうか。

津守　人間として、まともに生きていくのにどうするか。これは必ずしもキリスト教だからどうだとか、仏教だから、浄土真宗だから、あるいは何宗だからどうだなんて、そういうことを超えて、これからの日本が世界に対して貢献していく道ではないかと思います。これには、まだあと何百年か何千年かかかるのかもしれないけれど、それだけの時間をかけて、私どもがこれから本当の良い道をつくっていく。

すぐに言葉が僕は出ませんけど、本当に長い長い時間をかけないとできないけれども、でも、誰かがちょっとずつちょっとずつそれを積み重ねていく、それの大きな力になるのは、やはり保育者だと思うのです。でも、保育者なら誰でもいいかというと、必ずしもそうはいえない。保育者というのは、いつも子どもに触れて、子どもと一緒に考えて、そこから知恵を与えられて生きていく人間ですから、これからまだ私どもも、みんな年を取っていきます。でも、年を取っていくけれども、同時に何かそこで本式の、本当の道に立ち戻っていくのにどうするかという、そういう力も同時に与えられているのではないかと思います。

僕ももっとしゃべれればいいのですけど。

13. 質疑応答

高橋　本当にありがとうございました。ここで少し質問に入りましょうか。

菊地　多分、今日ここでこうして集まっているということが、驚異的な大きな力に引っ張られていくのを引き留め、引き留め、そして小さなものを積み重ねていっている、その小さな積み重ねの一つであったり、引き留めていくその力の一つであるのだなと感じながら聞かせていただきました。

皆さん、ぜひ質問、または感想でも結構ですので、フロアの方から声を聞かせていただきたいと思います。どなたかありませんか。お願いします。

発言者1　今日は本当に感動させていただいたのですが、年寄りだからという意識ではなく、これからもずっと若い気持ちで立ち向かっていくという気持ちを聞きまして、大変感動してしまったのです。私はまだ30代なので、本当に頑張ろうと、今はすごく感銘を受けてしまったのです。

一つ、私自身が問題に思っていることをお話しさせていただきたいと思うのですが、私のころ、子どもたちは非常に自由に生活をしてきた部分があると思うのです。例えば、教室でお友達を殴ってしまうとか、ちょっと暴言を吐いてしまうことが普通にあった時代だったと思うのです。

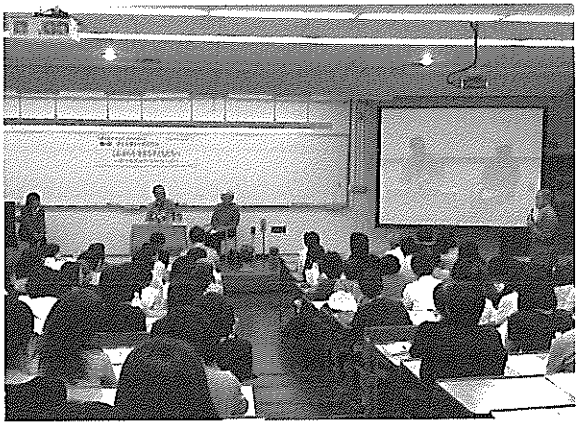
ただ、今現在では、とにかく人をたたいてはいけない、悪い言葉を使ってはいけないと、何でもかんでもいけない、いけない、やってはいけないという教育がすごくありまして、難しいのですが悪いことができない。悪いことをして反省したり、考えたりすることはたくさんあると思うのですが、とにかく

何か人と違うとすると、すぐ発達に異常があるのではないかといって特別の教室に入れられたり、非常に規制されている社会環境にあるのではないでしょうか。私も子どもを育てているのですが、昔と違って拘束されてしまっているな、子どもが本当の意味で感情を出せたり、自由に行動することが難しくなっているなというのを、ある意味、悲しいと感じています。その辺はどのようにお考えかお聞きしたいです。

津守　本当にそうですね。僕もすぐにこうやって応答ができないのが、まどろっこしい思いを自分でしています。あなたの言われた最後の言葉を、もう一度教えてください。

発言者1　やはり、あれも駄目、これも駄目、人を殴っては駄目、悪口を言っては駄目、もう子どもたちは全部、駄目、駄目、駄目なのです。一度も言わせてもらえない。もちろん、殴ることはいけないのですが、やはり相手をたたいて分かることも私たちのころにはあったように思うのです。試すと言うと言葉が悪いのですが。

津守　それこそ、こうやって保育のことを勉強する人たちの大きなことでしょうね。これだけ保育のこ



とを勉強しようとし、あるいはしておられる方々が集まっている。その人たちの保育力を試されているのではないかしらね。これが長い年月にわたって続いていくように、それを請い願います。

発言者1　ありがとうございます。

菊地　今のご質問に対してでもいいですし、何か別の質問があればお受けしたいと思うのですが、どなたかいらっしゃいますか。

多分、小さいところでこと子どもに対してあれも駄目これも駄目と駄目が出される時は、大きなところで本格的に駄目なことが起こっている社会であり、時代であるということですよね。駄目の出しようがないような世界では、子どもに対してこそ小さな駄目がたくさん出されてしまうのかなという気がします。

発言者2　津守先生、こんにちは。今の方のお話なのですが、そのとおりだと思うのです。たたいてはいけないのだし、言葉の傷つけもいけない。駄目、駄目、駄目という中で、保育者もどんどん委縮してしまっていると思うのです。だから、子どもが誰かをかんでしまったり、たたいたり、それはいけないことではあるけれども、その子がたたいたり、かんでしまったりする、せざるを得なかった思いというものがあるのです。そういう思いを抱いた子は、こちらから言葉で何か言われても、心にすごく傷が付いているからかんでしまう。でも、心の傷は見えないので、どうしても手が出たり、たたいたりする方

が駄目、駄目、駄目と言われてしまうのです。

申し遅れてすみません。私は幼稚園に勤めています大田和と申します。幼稚園にいるのですが、幼稚園の立場としては、例えばこの人の顔を引っかいてしまった。そのうちのお母さんが、「女の子の顔にこんな傷を付けられて」と言って来られたときに、「この子が今、あなたのお子さんのここをぐっと引っ張っちゃったのが、ここのお子さんから心にぐさっと傷が付くようなことを言われて、でも、それを言葉で返せなくて手が出ちゃったんだ。だから許してください」と、1回目は、みんな頑張ってそう言っていると思うのです。

ところが、得てして駄目、駄目、駄目と言われてしまう子は、余計うまく言葉で表せないし、気持ちを外に出せないので、同じことが続いてしまうのです。そうすると幼稚園側としては、この辺が傷ついたり、かまれたりした方が見えている。その見えてしまっていることに対して、幼稚園の中で起こっていることなので、「こういうことで心の傷を負っちゃって、やっちゃったことなんです。すみません」とだんだん言えなくなってしまっていると思うのです。同じ子が何度もするので、先生たちが。

そうすると、今度はしないように、しないように、たたかないように、引っかかないように、引っかかないようにと、やる前に一生懸命ガードしてしまう。そうすると、それは本来の保育、津守先生が「その子が能動的にやることには何か意味があるんだよ」とおっしゃっていることを分かろうとして保育しようとしているのに、ガード、ガード、ガードで固まってしまう。それを若い先生はなかなか言えないし、そういうことをいっぱい親から言われると、幼稚園が自分自身の保育の幅を狭めていってしまう。私はそれがすごく怖いのです。

今日、私も安心したというか、あちらの方がおっしゃったように、私ももちろん60を過ぎて、すごく自分が年を取ったと思うのですが、年を取ったいいことは、申し訳ないけれども、若い先生が言えないことを親に言えることです。幼稚園が駄目だ、駄目だ、駄目だと言って若い先生たちが委縮してしまう、自分の保育ができなくなってしまうようなことを、やはり幼稚園がもっと親に、私たちみたいな年を取った方がどんどん親に発信していって、「この駄目だと一般的にはいわれる行動には、こういう意味があるのです。幼児期に、今、この子がこれをした意味は、こういうことがあるのですよ」ということを、もっと幼稚園が自信を持ってどんどん発信していかないと、あちらの方が言われたように、もう駄目だ、駄目だ、駄目だ、保育者もどんどん委縮して、自分たちが本当にやりたい保育ができなくなってしまう。

その辺が、私が自分の幼稚園にいて先生たちの話を聞いていると、本当に怖くなってしまうほど先生たちの気持ちが委縮しているのを、津守先生みたいに力強く、お母さんたちに「こういう意味があったのだから、幼稚園はそのためにあるのだから、お母さんとしては許せないかもしれないけれど、許してね」と。「もう本当に申し訳なかった、痛い目に遭わせて。でも、この子だって、もしレントゲンに心の傷というのが写るとしたら、ものすごく大きな傷を受けているんですよ」と言っていく役目を担わないと、こんなに津守先生が一生懸命、こういう人が保育者ですよと言ってくださっているのに、切れてしまいます。

先ほど高橋先生が、「今になって津守先生がおっしゃっていることは、ずっと変わらなく一貫してあったことがよく分かります。でも、学生のときは全然分かりませんでした」。私も本当に津守先生は、何か仙人か何かだと（笑）。そんなことは現実にはあり得ないのではないかと。特に「子どものやるこ

とにはすべて意味があるのだから、大人はそれを分かろうとしましょう。それが保育者ですよ」と。そんなに子どものことに意味があるの？　ぐらいに思っていましたが、やはり津守先生、頑張ります（拍手）。絶対、負けないで幼児教育を守りたいです。

津守　本当にそうね。あなたも私も年を取ってくるけれど、年を取ったからといってね、それだけ衰えてしまうのではなくて、その中でほんのちょっとでもいいから、その中に光をともしてね、そして子どものことを考えて、そこを一歩進めるような、そういう力を欲しいですね。それが周りのこれから育っていく子どもたち、および保育者に、そういう力を付けていくということができるといいですね。

何かこれもまた私は、もっともっと言いたいことがあるのだけれども、20世紀というのはね、そういう点で僕ね、非常に知恵を出した時代だったと思うのです。21世紀になったら途端に、途端にと言ったら言いすぎですが、21世紀になって、非常にいいことに対して、積極的にそうだ、それがいいんだといって、お互いに励ますのではなくて、お互いにそれも駄目、あれも駄目といってね、足を引っ張るような力が、どうも今の世の中にはびこってきているような気がする。それは私ども、これから一緒に、どんどん年を取っていくにつれて、ますますどんどん知恵を付けて、どうやったらこういう時代に知恵ある発言ができるかということですね。知恵を出していきたいですね、本当に。

菊地　ほかに何か、今のことにかかわってでもいいですし、ほかのことでもいいですし、もう一方ぐらい。

発言者3　今日はどうもありがとうございました。私は小学校で学ぶことが多かったので、津守先生のことはお名前だけは存じ上げていたのですが、もっと若い先生だとばかり思っていて、今日、この会場に来て拍手が起こったときに「あれ？」と思ったのです。全然違っていて、もう帰ろうかなという感じで聞いていたのですが、最後までいて良かったと思っています。ありがとうございました。先生の教育にかける情熱というか、そういうものに触れることができたことが、一番大きな喜びだったと思うのです。

今のお話で言えば、管理職に責任があるような気がするのです。私が責任を持つという管理職がたくさん出れば、若い人たちは本当に自由にできるような気がするのですが、残念ながらそういう管理職は少ないです。ですから、ぜひ、ここにいらっしゃる皆さまは、自分が最後には責任を取るとみんなの前ではっきり言って、自分の目指す教育ができるような管理職になっていただきたいと思っています。今日はどうもありがとうございました（拍手）。

津守　ありがとう。そんなお話をしていただいて、本当にありがたかったです。本当に年を取ったからといって、それで年寄りの重鎮になってしまわないで、こうやって若さを持って、こうやって若い方々の中で発言してくださるというのは、本当にありがたいことです。

菊地　ありがとうございます。どうでしょう。では、お願いします。

発言者４　先生、こんにちは。私は今、ずっと児童相談所で仕事をしていて、もう毎日毎日大変で、でも、今日、先生にお会いすると絶対元気になると思って来ました。そうしたら、やはり元気になりました。

今、いじめの問題がすごくクローズアップされていて、児童相談所にはいじめている子がやって来ます。それは学校ではもう対応できない、警察を呼びます、児童相談所で指導してくださいとやって来ます。その中で、私が先生からいつも学んでいたのは、どの子にとっても居場所をつくるということだったので、それをいつも心に刻みながら子どもと会っています。ありがとうございました（拍手）。

津守　本当ね。今、一番大変なところで仕事をしておられて、本当に私どもよりも、ずっとずっといろいろな知恵や知識を持っておられるに違いない、そういう方が発言してくださって、本当にありがたかったです。

発言者４　ありがとうございました。

菊地　ありがとうございました。どうでしょうか。もう一方、もしいらっしゃれば、ご意見なりご質問なり、聞かせていただきたいと思うのですが、よろしいですか。こういう会が終わった後、ここに飛んでこようとしていらっしゃる方も、たくさんいらっしゃると思うのですが、いかがでしょうか。はい、お願いします。

発言者5　今日はどうもありがとうございました。

ここの幼稚園には、今、お山にイチョウが残っていますが、先ほど、イチョウを切ろうとしたときに、先生が体を張って守ったというお話がありました。そのときの先生のお気持ちを、もし伺えればと。

津守　それはね、それは大変だと思ったのがまず第一ですね。これは、そう思ったときに思った人が発言しなければいけない、そのことを思いました。それで、その発言をするのには、大変ないろいろな抵抗がありました。大学の中での偉い人たちの、いろいろな抵抗がありました。けれども、それと同時に、私の考えに賛成してくださる方が何人かおられました。その何人かの方の力は、とても大きかったと思います。その方々に私は十分なお礼をも申し上げないままに、その方々はみんな亡くなってしまいました。本当に。

そういうことで、でも、それは気持ちはつながっていっているのではないでしょうか。私はそれに希望を託して、私は本当に十分なお礼を申し上げられなかったけれども、そういう申し訳なさと同時に、何かそんなことをいろいろ考えた、ということがあります。

発言者5　そのときに、子どもたちにとって、その木がやはり大切だと、先生がお考えになったということなのですか。

津守　はい、そうです。子どもたちにとってのみならず、私どもみんなにとって、そして、それはまた

樹齢何百年という木でしたから、現在の人だけでなく、何百年も続いたその木であることを、それを認識しなければと思いました。

発言者5　ありがとうございました。

菊地　はい、お願いします。

発言者6　今、大切なイチョウのお話が出まして、現在、附属幼稚園に勤めて、副園長をさせていただいている者です。今年、ギンナンが少し落ちはじめて、葉の一番美しい時期はまだこれからですが、これだけ話題になった、津守先生が心から守ってくださったイチョウを一目見て帰られると、またもう一つパワーが付くかもしれません。今日はほとんど全職員がここに参加していますので、誰かがいち早く行きまして外の扉を開けていますので、もしお時間のある方がいらっしゃいましたら、どうぞイチョウに会っていってください（拍手）。

津守　何だかこんな話になって、僕は申し訳ない思いと一緒に、それからね、本当にあの時代にそれに反対された方、それから同時に木を切ることに賛成された方の声もまた大きかったのですね。

発言者6　すみません、追加で。確か先生は6年前に一度幼稚園にいらしてくださって、ちょうどその

ときにお山の上まで上がられて、イチョウにあいさつをしてくださっていたお話を懐かしく思い出します。津守先生が大事にしてくださった幼稚園と、そして子どもたちと、そしてイチョウという思いでしたので、思いもかけない流れなのですが、とてもうれしく思って思わず発言させていただきました。

津守　ね。あれから何十年たったのでしょうね。何年ではなくて、もう既にみんなが忘れてしまう今ですね。何十年かたったそんなときに、やはり言っておくものですね（笑）。

菊地　ありがとうございます。思わぬ特典付きになりました。お話にあったように、何百年もの間、立っていてくれたものですし、それに象徴されるものを、やはり保育というものは、ずっと営々と守ってきているのだと思います。今日は本当に、皆さんと一緒にお話が聞けて良かったと思います。津守先生、高橋先生、私たちの所にいらしてくださって、本当にありがとうございました。もう一度、大きな拍手で（拍手）。

皆さん、ご自分たちにも大きな拍手を心の中でたくさんして、イチョウもご覧になって、気を付けてお帰りください。拙い司会で失礼しました。ありがとうございました（拍手）。

〈巻末資料〉

津守眞ペスタロッチー賞記念講演『幼児の教育』２００７年４月号（第１０６巻第４号転載）

「若き日の志から五十年を経て」

若き日の志から五十年を経て

津守　眞

二〇〇二年十一月二十七日、広島大学教育学部・大学院教育学研究科より、私は思いがけず、ペスタロッチー賞を授与された。ここに掲載するのはその時に行った記念講演の全文である。

1　ペスタロッチーの名は、私が少年のころから知っていましたから、その名の付いた賞を授与されるのは、光栄であり、本当にうれしいことです。これが私の最初の感想です。

2　次に、私はこの五十年間、それぞれの時期に、私立の小さな学校、愛育養護学校を通して一緒に子どもの仕事をしてきた人たちがいます。同僚の保育者たち、非常勤、ボランティア、親たち、子どもたちです。それから私自身の家族です。皆で〝よってたかって〟つくってきた学校です。

3　第二次世界大戦の時、私は大学生で、心理学を専攻していました。入学して間もなく、一兵卒として召集され、軍隊に行きました。日本は敗れ、大日本帝国陸軍は解体され、自由な身となって家に帰ることができました。自由を得て帰ってきた喜びは忘れません。一面焼け野原の中を駅に向かう道の脇に、夾竹桃の真っ赤な花が咲いていました。あの燃えるような赤は瞼の裏に焼き付いています。復員してきた学友たちがカーキ色の兵隊服のまま、次々に教室に戻ってきました。教室の窓ガラスは空襲で破れたままでしたが、寒風の中でも再び学問ができる喜びに意気込んでいました。私は、その中で、敗れた祖国の再建は教育にあると考えました。コメニウ

ス、ペスタロッチー、フレーベルの人間教育です。

このことを語るとき、岡部弥太郎先生の幼児教育の講義の中で、しばしば言及された広島大学の稲富栄治郎先生にふれないわけにいきません。稲富先生はコメニウスの研究者で、『広島原爆記―未来への遺言』（講談社）の記述は熱い思いなしには読めません。

4　私は大学を出てすぐに、愛育研究所で児童相談の手伝いをしていました。そのころは子どもの数が多くて、子どもたちが街にあふれていました。学校も幼稚園も二部制で、障碍のある子の行き場がありませんでした。私は、幼稚園、学校に行かれない子どもたちの保育の場が求められていることを知りました。研究室の一室で、知恵おくれの子どもたちのための「特別保育室」を開きました。昭和二十四年六月です。

その最初から、障碍があっても、幼児は遊ぶことを欲していることを身をもって知りました。当時は精神薄弱と呼ばれていました。能力がないために排除されている子どもの教育は一国の文化のバロメーターではないかとの考えに、当時の先輩研究者たち、研究所のトップの人たちも同感し、励ましてくれました。

5　今回賞を頂くことになり、何に対する賞なのかを考えたとき、それは私がやったことに対してではなく、やろうとした志に対するものだろうと思います。

6　いま述べたのは、青年期に私に起こったことです。

私は生涯を二十年ごとに区切って考えます。

その次の二十年、私は、お茶の水女子大学附属幼稚園で、心理学によって、幼児教育をつくろうと考えました。もはや戦時中の偏狭な日本精神によるのではなく、科学の方法による教育を求めて模索する時期が続きました。しかし、厳密な科学になろうとするほど目の前の子どもの求めに応えることができなくなることを私は知りました。

7　児童相談の経験から、私は、日常生活を丁寧に見ていれば、改まって検査場面を設定しなくても、精神発達を知ることができると考え、発達診断法を作りましたが、それは学問的に可能なものですが、同時に、子どもを発達段階によって区別することの危険をも感じました。

8　私の主たる関心は、人間の成長で最も大切な、「根」にあたる幼児期の保育にありました。幼児であることにおいて、障碍があっても、なくても、違いはありません。

私は、以前は研究者と実践者とを区別して考えていました。しかし、研究者も実践者になることもあり、実践者も研究者になることもある。どちらも人間のすることです。

倉橋惣三の詩。「子どもが飛びついて来た。あっと思う間にもう何処かへ駈けて行ってしまった。その子の親しみを気のついた時には、もう向こうを向いている。私は果たしてあの飛びついて来た瞬間の心を、その時ぴったりと受けてやったであろうか。――時は、さっきのあの時であったのである。――いつ飛びついてくるか分からない子どもたちである。」(『育ての心』フレーベル館)

どちらにも共通の、子どもの視線に立つ配慮です。

保育の実践は、私の時間と労力を子どもに与えることです。倉橋惣三の「子どもが飛びついて来た時」は子どもとの出会いの核心をついています。

9　次の二十年、私は当時の科学からみれば非主流の学問、フロイトやユングから、また、ランゲフェルト、フェルメールなどの現象学的教育学に学びました。ランゲフェルトが言った、誰かが本気になって子どもの世話をしなかったら、子どもは育たないとの言葉を私は忘れることができません。どの国にも、そのように考えて子どもの保育をしてきた人たちがいるのです。

10　一九八三（昭和五十八）年、養護学校が義務化されて間もなく、私はお茶の水女子大学を辞職し、愛育養護学校の校長となり、毎日を子どもと共に過ごす者となりました。

「一日、保育の現場に出ることは一冊の本を読むようなものだ。理解しながら読むこともできるし、訳の分からぬまま読みとばすこともある」。私が校長となった最初の感想です。「昨日のことで身内が熱くなりながら今日も一日を現場で過ごす」。こうなった時、私はほっとしました。これが私が学んだことであり、以後、私はその連続線上を歩んできました。次第に自分の保育の輪郭が

はっきりしてきました。

11　保育の一日は、毎日違うし、子どもによって違います。

しかし、違う日々を貫いて、共通のことがあります。私は毎朝、子どもと出会うことから始めます。「出会う」は身体の肌で出会い、心の肌で感じることです。

子どもの行動を内なる世界の表現と考えると発見があります。理解は知的な喜びです。表現をどう読むかは保育者にゆだねられています。理解の仕方に応じて応答の仕方は違ってきます。「困った」と否定的にとらえるか、肯定的にとらえるのかによってかかわり方は違います。理解とは知識の網の目に位置付けることではなくて、自分が変化することです。保育実践における子どもの理解の仕方は実証科学の方法とは違います。子どもと直接にかかわり、子どもと遊ぶことです。

私どもが将来への不安にとらわれて現在をおろそかにしたら、子どもの求めに応じてかかわることができません。

保育者は少しの時間も気を抜くことを許されません。子どもが目前から去ったあと、さし迫った現実の要求からひととき解放され、子どもと応答していた時の体感や物質のイメージなど、最初の感覚を思い起します。その省察は、個人的作業ですが、同僚と話し合うミーティングの時を欠くことができません。保育の場を共にした人たちと話し合うことにより、同じ子どもの異なった側面をも知り、子どもの全体像が見えてきます。

ミーティングによる発見です。そのとき人々の間に上下関係はありません。実習生もベテラン保育者も壮烈です。男、女、老若、人によって違った角度から見ているし、子どもは大人によって見せる顔が違います。それぞれが子どもに触れた直接体験を語り合う時、子どもの全体像が見えてきます。保育者同士、互いに話し合う時間がなくなったら、保育の質は向上しないし、子どもも成長もないでしょう。

12　実習生、ボランティアを受け入れることが自分たちの保育にプラスになります。このことは私の保育生活でいくら強調してもし過ぎることはありません。保育にかかわる人たちは皆対等です。私どもの学校では、かなり

早い時期から、複数の大人で保育するのが当然と考えていました。実習生は指導の「対象」ではなく、一緒に保育をする仲間であり、同士です。それがこの子どもたちの未来をつくるのに、図らずも大きな力になっています。

13　子どもの成長の観点から言うならば、子ども自身の存在感がしっかりしていなければ、どんなカリキュラムも意味をなしません。どんな子どもにも自分から何かをしようとする能動性があります。子どもが自分からし始めることには、必ず意味があります。大人がそれに協力することによって、生活がつくられます。創造的であるとともに、社会にとって建設的な生活がつくられます。他人からやらされるのでなく、自分が選んだことを自分のペースでやることです。

互いに相手の思いに合わせてやりとりする相互性は、規則や管理による統制とは違います。民主的社会性です。

こうして人間の自我がつくられます。わがまま、利己主義とは違います。力を込めて自分で何かをする体験が未来への自信と希望をつくり出す力になります。

具体的なことは日々違います。子どもによって違います。一日として同じ日はありません。

14　小さな行動に目をとめること。

子どもが私に手を触れた時の感触からその時の子どもの気持ちがわかります。親しみを感じさせる柔らかい手。立ったままで動こうとしない、不安な姿勢。砂の中に手を埋める、自分を外に出したくない、他人の目を気にしている手、などなど。

子どもの行動を心の表現としてみると、「発見」があります。保育者それぞれの発見です。私が保育者二年目、小さい子を押し倒し、髪を引っ張る子どもに悩まされた時、「暗闇で背後から肩を掴まれることが人間の恐怖の根源」であることを、ノーベル文学賞を受けたエリアス・カネッティは『群衆と権力』（岩田行一訳　法政大学出版局）の中で述べていますが、この子に対して私も同じことをしていることに気がつきました。小さい子の髪を引っ張る時、私はこの子の肩を掴んでいます。それはこの行動をますます助長するのではないか。優しい目で見られることを最も欲しているのはこの子ではないか。どうしたらこの子に優しい目を向けることができる

か。そこから私の次の保育が始まりました。

保育者それぞれの発見です。このような例を話すと限りがありません。

科学では優れた研究者が発見したことを当てはめて応用しますが、保育では一人ひとりの人が子どもに直接触れて発見し、それに従って子どもに応答するのです。最も人間的なことです。保育者は発見の喜びと、その展開を見る楽しさがあります。それができないときは、自分にも子どもにも苦悩の時です。自分自身を根底から考え直し、自分を変えなければならないこともあります。

15　子どもが主人公である学校。それは私が校長になって最初の大きな課題でした。一人ひとりの子どもが、ここは自分の学校だと威張って過ごせる場所。そう思えなかったら、子どもの成長はないでしょう。そう思えない時は実際にはいくらもあります。倉庫の教材を全部教室に運ぶことを主張する子。「子どものすることには意味がある」。その子に協力して一緒にそれらを運んだ時、スーパーの店のイメージがその子にあることが分かりました。子どもが始めたことに大人がどう協力するかが問われています。子どもは大人よりもずっと、建設的に未来を見ています。それを信頼することから教育は始まります。

16　私は、障碍のある子どもは何もできないと以前は思っていました。長年つき合っているうちに、それは偏見であることが分かってきました。重い障碍をもっていても、自分が社会に貢献したいという高いプライドをもっています。他人から一段低く見られていると感じることが、「荒れた行動」を引き起こします。

「分かるはずはない」ことを前提にして幼児向きの易しい本を読むのではなくて、精神的に高度な本を読むことが子どもに訴えることを最近になって私は何人もの子どもについて経験しています。アンデルセンの人魚姫の原文を読んで、自分が泡になってもいいという箇所で、その子は涙を浮かべました。ピノキオの続き物の本を持ってきて読むことを求めたのは激しい行動をした男の子でした。旧約聖書の柔らかい肌のヤコブが毛皮を着けて父親をだます箇所でニヤリと笑ったのは言葉を話すことをしないベッドに横になって一日を過ごす子どもでした。

イザヤ書の「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない」という箇所を読むと目を輝かせたのは一度も歩いたことのない子でした。

こんなことしかできないと、決めてかかってはいけない。高尚な精神はこの子たちの中にもっと強くある。

高いところに輝く光を見つめるのは生後間もない赤ん坊です。生後八か月の赤ん坊は長い棒が好きです。滑り台の下から上を見て上がろうとするところに、私どもは高尚な精神の始まりを見ます。

17　アート、音楽、造形を私どもはたいせつにします。障碍のある子どもは特に、言葉を使うことが不得意で、音と動き、造形で表現します。アートの専門家たちが毎週定期的に参加します。それは子どもにも職員にも大きな力とインスピレーションを与えています。

18　もうひとつあります。現代の日本の乳幼児のことです。

都会の中心に住む私の周辺は、子どもがのびのびと育つ環境ではありません。

外に出られない狭い部屋で、一日の大部分を過ごさねばならない子どもたちが増えています。

どの子も言いたいことがいっぱいあります。「もっと長い時間自由に遊んでいたい」「大人はボクをおいて何処かへ行ってしまった」「ほんとは玩具ではなくて、ボクを見ていてほしかったんだ」などなど。子どもには小さな願いがいっぱいあります。

保育所設置基準を守らなくても簡易に保育所がつくられるようになって、幼児の環境の悪化は一層ひどくなりました。保育士の研修時間が減り、保育者同士が互いに理解し合うことが困難になり、大人の管理が窮屈になっています。

もちろん、環境も内容も良くやっている保育施設が数多くあることは希望です。

19　私は六十数カ国が加盟するＯＭＥＰ（世界幼児保育・教育機構）の日本代表を長年つとめてきました。かつては日本の保育は世界に誇るものでした。設置基準を守ら

なくてもよくなったころから、その誇りが失われつつあります。

その根源には、歴史的緊張感の中で作られた教育基本法、日本国憲法を変えるという動きがあります。

昭和二十年、敗戦の時、当時青年だった私が、六十年間抱き続けてきた、新しい時代への希望と誇りと生き甲斐が、時代の流れとともに壊されていくのを恐れます。

20 幼児に出会い、しばらくの時を一緒に過ごすと、そのとらわれない新鮮な見方と、生命力に驚かされます。いつの時代にも、どんな境遇にあっても、それは幼児を保育する者にとって事実であり、深めて考えることのできる体験です。

乳幼児期こそが人間の基礎（根の部分）をつくります。その根から枝葉が育って、青年、壮年へとつながります。

豊かな自然、豊かな時間・空間、豊かな人間関係、高尚な精神。これらがあれば、どんな子どもも立派に育ちます。子どもたちと共に新しい世界をつくろうではありませんか。

終わりに

この子たちが大きくなったらどうなるかと質問されるでしょう。

ひとりの人、ひとつの組織がそれをすべて引き受けることを私は考えません。関心のある人が、それぞれの仕方で、その子を交えて、それぞれがよいと思う考えに従って、何かをするのです。私どもの学校には週二日の青年部がありますが、多くの人は地域の作業所に行きながら、多様な活動をしています。

今日は、愛育養護学校で長く保育者として働いてきて、この三月まで校長だった岩崎禎子さん、同じく長く一緒に仕事をしてきて、退職後は自分の家を改造して卒業生たちの活動の場をつくっている千田道子さん、それから、小さい子どものクラスで保育をしてきて常に私と共に関心をもち続けてきた私の妻が一緒に来ていますので紹介します。

今回頂いた賞は、組織によらず多くの人たちの協力に対して頂いたものと思っています。

ありがとうございました。

（保育研究者）

「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業（*ECCELL*）

第6回　お茶の水女子大学　*ECCELL*

子ども学シンポジウム

これからを生きる子どもたちへ

～津守眞氏からのメッセージ～

津守　眞氏
（お茶の水女子大学　名誉教授）

聴き手　高橋 洋代氏
（立教女学院短期大学　名誉教授）

日 時：2012年10月13日（土）
13:30～16:00

会 場：共通講義棟1号館304室

詳細はこちら

お茶大　ECCELL　検索

nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

▲　お茶の水女子大学 ***ECCELL*** 子ども学シンポジウム　案内チラシ

お茶大子ども学ブックレット　Vol.4

2014年9月30日　発行

発　行　国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」（**ECCELL**）
浜口　順子
編　集　菊地　知子・猪股　富美子
連絡先　〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1　お茶の水女子大学本館335室
TEL&FAX　03-5978-5663
E-mail　nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp
URL　http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji

印　刷　光写真印刷株式会社